

二つの妖狐譚 田川くに子

——『妖婦伝』と『玉藻譚』について——

文化二年、江戸と大阪で、わずか五、六個月前後の時間的ずれで出版された、『絵本三国妖婦伝』と『畫本玉藻譚』は、同じテーマを扱った読本であること、ともに化政期の金毛九尾の妖狐流行の緒となつたことなどで、注目される作品であるが、これらのテーマを扱った物語伝説の類は、すでに江戸以前にも数多く存在していて、ことさらに目新しい素材ではない。江戸時代に入ってから、紀海音『殺生石』、『玉藻前驥袂』（宝暦元年豊竹座）、『通俗白狐通』（寛政三年）、『殺生石水晶物語』（黒本、青本、明和七年）、その他歌舞伎狂言の舞台で、金毛九尾はともかくも、玉藻の物語はしばしばくり返されていたらしいのである。

文化二年版二つの金毛九尾の読本のうち、大阪で出版された岡田玉山『絵本玉藻譚』の序文を見れば、文化初頭に、この二つの冊子が出版される前後の事情が、いくらかは推測できる。

過にし寛政丁巳のとし、此物語を編、絵を繡ものして、既に書肆に授ぬれど、まだ校を終ざるほどに、唐土名所図会なるふみの、撰にかゝりて、何くれと暇なくうちやりしに、今年春の季、それらのことどもしはてたれば、頓てこの校正をもなしてんとはかる

に、三国妖婦伝とかやいへる絵草子の、東都にて行はれしをきけば、木に彫り世に寿せんも、本意にあらねば、反故にものせんといふを、書肆らうけがひながら、はやく梓にのぼせ、あまさへ浪華に名たゝる大人の、くさゞの序をも需て、閏月の中旬、刻なりぬと僕に示す。かうがえたゞざる事をさえ、せざるものをと、足摺すれども甲斐なし

文化二年閏八月の記載があるこの文章は、同年一月刊の『三国妖婦伝』の後塵を拝したことについての事情が説明されているわけであるが、筆者玉山（果して玉山としてよいかどうかの問題があるが、これは後に触れる）には、出版がおくれをとつたことよりも、校正不備のまま世に出たことを残念に思う気持が強く、江戸で『三国妖婦伝』が先に世に出たことに関しては、さほど齒がみをしているわけではない。それは当然で、寛政丁巳（九年）以来七年間、うちすててあったこと、その間他の仕事に気を奪われていたことなど、この作品に対する打ち込みようは、さほど熱の籠つたものとは思われず、従つて他に先を越されたからといって、今さらその事自体を後悔する気持は、さほど強くはなかつたと思われるのである。

中村幸彦氏は「それにしても余りにも相似た蘭山の作品は、上方の計画を察知した結果と思われて仕方がない。兎も角東西書肆の読本の新様式をめぐっての激しい対立の様子を示す十分の例とはなるであろう」（『読本展回史の一齣』）と、二作が相前後して世に出た背後に、東西出版社の企画の探り合い、対立競合があったことを推測しておられるが、こうなると流行も自然発生的現象ではなく、作為や競争の上に成り立つ社会現象で、化政期には、都市の流行現象が、商業資本の舵取り一つで、どうにでもなるほどに大衆化され、しかも江戸と大阪が、それぞれ別の都市圏として孤立しているのではなく、次第に近接して、一つの文化圏を形成するようになっていたことが窺われる。こうして金毛九尾の妖狐は、殆ど時を同じくして、東西両方の書肆から世に出て、流行の端緒となったわけである。

それにしても、事の事情が詳かでない点は、実に多い。流行はあくまで流行であり、我々はそれにのみ眼を奪れてはいけない筈である。これらほきわめて表面的な社会現象に過ぎず、これをもたらしただ社会の底流には、何か別の形の潜在的エネルギーがあった筈である。きつかけは書肆の企画合戦であるにしても、相似た構想の作品が、東西両地に一度に出るといふことは、読本が長篇化する期を準備する、潜在的エネルギーが、底流にあったことを意味しないだろうか。たとえば寛政三年に『通俗白狐通』という作品が、京阪で出ている。四巻四冊のみの小篇で、古代末期京都宮廷に起った不祥事という、伝統的玉藻伝説の形式をとりながら、挿話として、巻之二から巻之三にかけ、班足太子花陽夫人の故事のみを、かなり詳しく記している。殷周を省き、天竺の物語のみに筆を集中すれば、この

物語の性質上、たとえ作者がそれほど意識しなくとも、全体の印象は、相当地に仏教的色彩が濃くなる結果となる。この冊子は、宝曆明和頃から寛政期にかけて多く出た説話の勸化物の通俗書ではないかと思われるのである。

『畫本玉藻譚』のもとになっているのは、『勸化白狐通』（明和三年刊）という三国伝来の金毛九尾伝説と、同じ説話の勸化物であるということを描されたのは、後藤丹治氏であった。（『説林』三の一、昭和二十五年）一方、『繪本三国妖婦伝』の筆者高井蘭山は、序の冒頭に、

嘗有狐婦之伝十五卷。不識何人作。

と記し、

其首尾記炳焉者也。書肆欲上木之来乞校。

愚操觚修飾。北馬子以丹青潤色。全十五冊校成更題曰三国妖婦伝。

と、『繪本三国妖婦伝』には、種本があることを告白している。この種本八狐婦之伝十五卷なる書が、現在写本で稀観本になっている『三国悪狐伝』であること、この『三国悪狐伝』の殷周の部分には、『通俗武王軍談』（宝永二年、清池以立）によって成っていることなどを、指摘されたのも、後藤丹治氏である。残念なことに私は、『三国悪狐伝』も『勸化白狐通』も、まだ見る機会に恵まれていない。であるから例えば、岳亭丘山がその著『本朝悪狐伝』（文政十二年）の序で、「近頃或禅僧または是を編述して三国悪狐伝といふ書を著せり」というとき、丘山が文化十二年の時点で言う『三国悪狐伝』と、蘭山言うところの八狐婦之伝十五巻が、同一の書であるか否か、それさへ見当がつかなくて困るのである。「近頃」など

とみて、「神社考の作者及び彼禪僧らも猶世の人を惑すの狐なるべし」と、「彼禪僧」を、『神社考』の著者林羅山と並べ称していることから、それほど近い世の事を指しているのではなさそうにも受け取れる。また寛政三年の『通俗白狐通』（国会図書館蔵）は、明和三年の『勸化白狐通』と、何か関係がありそうに思われるが、どうであろうか。ともあれ、海音の『殺生石』、豊竹座『玉藻前囃袂』（「那須野狩人那須野獵師」の角書のあるもの）などは、舞台を通して表に現われた、ごく一部の現象であって、底流には、史談風読物、勸化物、勸化物をさらに通俗的にしたものなど、写本、刊本さまざまなスタイルで、世に行われ、みな相應の読者を持っていたことが想像されるのである。

こういう混沌とした底流から、長篇の読本の形をとって現われ出た二つの読本は、確かに構成の上からは相似しているが、その底流に三国伝来の長篇構想を志向する傾向がすでにあつた以上、二つの読本が期せずして同一の構想を持った事は、別に不思議とも思われなない。それに三国伝来の構想自体も、金毛九尾の妖狐に始まつたことではないのである。

問題にしたいのは、相似た構成を持ちながら、『絵本三国妖婦伝』と『書本玉藻譚』は、決してそれほど似ている作品とはいえないということなのである。

両書とも八絵本Vを表頭に冠していることは、長篇の読本にも、当時はいかに挿絵が大事に扱われていたかを意味している。ことに岡田玉山は、当時上方では屈指の描き手であり、その玉山の方から、絵入り長篇の趣向が出ている点が、やはり注目されるのであ

る。実際挿絵から見えていくと、この両書の価値には、かなりの差があるとしか言いがたい。勝負にはならないのである。しかも玉山の絵には一部彩色まで施してあって、七年間も書肆に預けたまま放置してあつたというだけあって、余裕たっぷり、楽しみながら丹念にやりとげた作品という雰囲気が見るからに漂っている。これは技法の点からも言えるのであって、北馬子の画風は平凡で、特に人物の表情に生彩がないのに対し、玉山の絵は、細密なペン画風な描き方で、全体に重量感が漲り、人物の動作や表情にも、動きがある。後に『唐土名所図会』などものした玉山だけに、唐土の場面などは、建築物、人物ともに研究と工夫のあとが見え、左右対称の緻密な構図が、遠近の感覚を加味して描かれ、この唐土趣味が、日本の場面を描く場合にも出てくるのが面白いのである。北馬子が天竺と唐土を描き分けるきめ手を持たず、天竺の場面も中国風意匠でお茶を濁したのに対し、玉山は天竺の場面は明きらかに、西洋の風俗を意識して描いているようで、ヨーロッパ風の宮殿や、甲冑を帯した武士を描くとき、ペン画風の緻密で重量感ある筆法が、素材にマッチして、一つのエキゾチックな雰囲気を出すのに成功しているのは確かである。

さて『三国妖婦伝』は三卷十五冊、『玉藻譚』は五卷五冊、両作品の量の違いは、そのまま内容の違いに帰結する。この違いは、一方が軍談実録物の影響を受けた作品、つまり八妖婦之伝十五巻Vを種本にし、一方が勸化物の影響のもとに成立しているという、事情の違いに依るかもしれない。しかしこの点については、今は精述する資格がないので、ただ素朴に両作品を比較した印象を、整理して

みたい。

はっきり言えば『三国妖婦伝』の場合、筆者蘭山は、長篇に向かつての覚悟や身構えが、いち応なりとも用意されていたということである。作品の評価とは別に、このことは認めておかなければならないだろう。彼はあらゆる点に於いて、曖昧なものを残さないように努めている感があり、このことは少くとも、この作品に二つの特質を加味することになった。一つは歴史的時間の推移を重要視して、年代記的記述を徹底させていること、もう一つは、主人公玉藻に、驚くほど個性的輪郭を与えてしまったことである。だがそれは、美女や普通の女を、愛し、認めたからではなく、むしろその逆であるから、複雑なのである。

△妖婦Vという言葉にも象徴されるように、筆者の女に対するこだわりの感情と、警戒心は相当なものである。きわめて特殊な女性、つまり妖狐の化身の美女が、この世にいろいろな危害を及ぼす物語を書くとき、その根底に、女性一般への警戒心や嫌悪感が必要でないと、どうして言いきれるであろうか。少くとも蘭山の場合、これが一つのモチーフになっているのは間違いない。もし普通の人間の悪女であれば、悪女を描かなければいけない動機の中に、逆に作者の微妙な心の揺れ動きが推理されたりして面白いのであるが、妖狐の化身の美女は人間ではない。人間ではないものに身を任せるというほどの怪奇趣味もない蘭山は、ただ抹殺されるべきものとして、これを眺める他はない。そういう意味では躊躇いもこだわりのない明快さの中に、目的は一つであり、筆者には何の迷いもないのである。

序文の中に、もし「語不_レ云乎不_レ語_レ怪力乱神」。此挙也為_レ子不

取_レ一という批判を受けたらどうするか。それに対する反駁の論拠はただ一つ、「美女之令喪_レ国家」。雖_レ其性非_レ妖狐_レ而古今如同日_レ焉_レであり、また「妖狐非_レ化_レ美女_レ而美女_レ如_レ妖狐_レ也」であると述べている。これは卷末に至つて再度強調され、警世の書であることが、くり返される。江戸の士大夫の心意気かもしれないが、せっかく妖狐の美女を扱いながら、もう少し面白い展開もあり得ただろうに、ただ拒絶と抹殺の道をひたすら歩んだために、長篇の体裁をとりながら、最後は瘦せて貧相で、尻つぼみの作品になった感じがある。

だが妖狐を拒絶する蘭山が、拒絶しようとする妖狐に託して描いた、嫌悪すべき悪女は、如何なるものであったか。これは興味のあるところで、筆者の悪女観がこれほど明快に表現される格好な場はない。実際の人間の美女悪女を描く場合は、こうはいかないはずだからである。この点蘭山は、たぐい稀な正直な男といつてよいかもしれない。なんとなく女嫌いの雰囲気を感じさせている馬琴でさえ、その作品の中ではなかなか単純ではないのである。

姐己、華陽夫人、褒姒につらなる玉藻の前が、わが文学史上に姿を顕したのは、南北朝動乱の後、室町時代もさほど遅い時期ではないと思う。『神明鏡』『下学集』『お伽草子の『たまものさうし』『謡曲「殺生石」』など、いろいろな作品を列挙できるわけであるが、たいいていの場合、約束事のようなものがあり、陰陽師安倍泰親（泰成、康成）が、妖魔退散の祈禱を修するとき、泰親の発案で、天皇の寵姫玉藻の前は、幣取り役にさせられる。勿論玉藻は不承不承、勅命否み難くて幣帛を持ち、憑坐（よしまし）の座につくのであるが、巫女と同一視されることが、玉藻のプライドを傷つけないわけ

はない。お伽草子から、玉山の『畫本玉藻譚』に至るまで、玉藻が幣取りに指名され、大いに怒るところを書いている。しかしそれは「抑我家に伝り候祭事には必女子を以て幣取の役と成す。其女子に相生相尅の差あり、相生の女子を得る時は祈祷ごとごとく驗あり。相尅の女子得れば其驗なきのみならず、却て災ひあり。上下を云はず相生の者を指て幣取と成ん」(『畫本玉藻譚』)というように、陰陽道の論理には勝てず、陰陽師の企てにまき込まれ、幣取り役に成りさがってしまう。寵姫から巫女へ、惨めな転落である。

蘭山は、このような見るに忍びない玉藻は採らない。「汝檀を構て祈る形相御惱平愈の為とは見へず、まったくみづからを除んと呪咀なるべし、よくも帝を謀りまゐらせ、清涼殿を汚せし」と、殿上にしつらえた祈祷の祭壇の前に進み、泰親の祈りを中断させ、堂々とわたり合う。凄しい論戦である。だいたい玉藻の弁舌は鋭く、説得力があり、泰親はいつも言い負かされ、恥をかき、帝の逆鱗にさえふれる。「たまものさうし」にも玉藻の弁舌があるが、これは内典外典に通じ、該博な知識を持つ、驚異の化女玉藻を強調するためである。「妖婦伝」の玉藻は、その事のために知識を誇るのではなく、彼女自身が、身の潔白であることを言い立てる動機が、根底にあるわけで、そこには強い自己主張のニュアンスがある。妖婦とされる所以である。陰陽師の論理にまき込まれ、自らを下級の巫女に落してしまふような、弱さのかけは微塵もない。玉藻は強い個性を持つ、独立した人格になっているのである。こういう女こそ変化の妖女であると考え、蘭山は嫌悪したかもしれないが、陰陽道の論理と戦う玉藻には、人間の女としての実在感があり、凛々しくさえ感じられるのである。

玉山の玉藻は、これから見れば、また別の趣がある。巫女的魔性からも脱することなく、元来の巫女性の上に、さらに新しい魔性を發揮して、頼政に退治される鶴の怪を編み出し、岩田川の水底の鬮髭が、鳥羽法皇の前世、熊野の蓮華坊のものであると予告したりする。勿論これも、彼女を激しく排撃する、陰陽師安保康成に對する、非常手段なのであるが、殺生石に化した後も、さらに美女や魔物に姿を変え、石屋法師を仰天させるなど(このところの挿絵は、相当にグロテスクである)、あくまで妖魔であることを止めようとはしない。彼女の自己主張は、常に魔性を通して行われているといつてよいのである。玉山により、妖魔の度をいつそう深めた玉藻と、蘭山の実在感溢れる個性的玉藻と、『玉藻譚』と『三国妖婦伝』が、同じ形式の作品だとばかりも言っていられない理由が、この辺にもあるように思う。

『玉藻譚』には、歴史的時間の推移に関する厳密さは殆どなく、極めて鷹揚であり、ルーズである。だが殺生石に化する金尾九尾の妖狐の怪に、もともと客観的歴史的位置づけなどある由もなく、ただ怪異物語としての論理を貫徹させ、充実させること、不気味で、面白ければそれでよいというのが、筆者のいつわりないところで、『玉藻譚』は、怪異物語の作者の分を程よく弁えたところに、自由に成り立つといつてよい作品である。これに對し、『三国妖婦伝』には、怪異を創造する方面に向けられた、情熱やエネルギーは殆ど感じられない。おそらく筆者蘭山の才能は、こういう方面にはなく、歴史的記述を厳格にして、年代記風に全体を整理、統一するのに向いていたと思われる。これもまた読本長篇化の条件の一つであるから、認めなければならないが、なんといつても素材は玉藻物語

なのである。歴史的時間の推移と、殺生石の怪の間には、埋めつくせない空間がある。これをどう処理するかというところに、長篇伝記の作者の工夫のしどころもあり、また歴史の舞台が大きく廻る、古代から中世への波瀾万丈の時期に、素材不足ということはあり得ないはずであった。筆者がひたすら細く、歴史的年代の推移を追ったのも、歴史の転換期の意味の重さを感じていたからに違いないが、小説作りの方法としては片手落ちで、肉付きの悪い、先細りの結末になったといつてよいであらう。

だいたい両作品ともに、紂王姐己や幽王褒姒の物語、また『仁王経』の班足太子と華陽夫人など、大陸輸入の故事伝説に由来する前半の部分に、質量ともに力をいれ、玉藻に化してからは、中世の説話が語るところをさほど出していない。陰陽師や東国武士が登場する、例のきまりきった型である。そのなかにも、幽王褒姒の故事を省いて、前半を軽くし、玉藻の魔性に八鶴Vの怪や、蓮華坊の觸髅の話を結合しようとした『玉藻譚』の方が、小説の体裁や、怪異譚の新趣向を工夫するという配慮の点で、いくらかまともであったといえるのではなからうか。

最後にひとことつけ加えておかなければならないこと、それは『京攝戯作者考』（木村黙老）によれば、読本『室の八島』（文化四年）の著者武内確斉が、岡田玉山の名で世に出た戯作の、本当の作者であるという記述である。岡田玉山は絵に巧みな人で『絵本太閤記』、『唐土名勝図会』などの仕事を残しているが、戯作としては、『玉藻譚』の他に、『阿也可志譚』（文化三年）がある。武内確斉については、『室の八島』の二つの序文の中に、いくらか紹介

されてはいるが、精しいことはあまり分っていない。ましてや玉山と確斉が、どういう関係にあったか、分らない事は多いのである。だが『京攝戯作者考』のこの記述は、見逃しにはできない。いま私は、原本の署名通り、いち応玉山の作として扱ってはきたが（絵は間違いないく玉山のものである）、どうやら玉山の背後に、武内確斉という人を置いて考えなければならぬというのが、本当のところであるようだ。文化三年の『阿也可志譚』は別名『白狐伝』とあるように、内容は信田妻伝説の戯作化である。寡作の確斉が、二つの狐の伝奇を手がけているのも面白く、いずれ『阿也可志譚』については、信田妻伝説文学化の系譜の一つとして、書きたいと願っている。その時同時に、武内確斉論がまとまれば、本望なのであるが、果してどうなるか、期待と不安の交ざり合うなかに佇み、途方に暮れているというのが、現在の私のいつわりないところである。

附 『絵本三国妖婦伝』は都立中央図書館特別文庫室で、『畫本玉藻譚』は、東北大狩野文庫、国立国会図書館で閲覧させて
いただいたものです。